

大熊町教育委員 かえつ有明中学・高等学校訪問概要

日 時：平成 25 年 11 月 20 日（水）15：00～17：00

訪問者：大熊町教育委員会 武内教育長、嶋貫委員長、阿部委員長職務代理人、小田委員、庄子委員、阿部教育総務課長、文科省 安井生涯学習官、市村係員

訪問先：かえつ有明中・高等学校 石川一郎副校長、山田英雄英語科主任、創造的復興教育協会小村次長

概 要：

※かえつ有明中高等学校は 8 年前に埋め立て地である江東区東雲に移転し、2020 年のオリンピック開催も決まり、多くのエネルギーが集まっている場所である。特にアクティブラーニングを実践している学校であることから、小村氏より双葉郡の中高一貫校設立において参考になる学校として紹介いただいた。

（石川副校長より）

○（双葉郡教育復興ビジョンの話を聞いてからのコメント）地域コミュニティと共に学校を作るとするのはとても難しく、このビジョンの内容はすばらしいと感じた。

○自分たちの土地の良さはずっと住んでいると分からない。自分がいいと感じるものと外が魅力を感じるものは違う。その地域の良さとは外から見て魅力的だと感じるものであり、地方の活性化には、どこでも汎用性があるものではなく、そこにしかないものが必要である。例えば、沖縄の石垣島は景観を守ったためにシーサーや町並みなど「沖縄らしさ」を求める人が行く。「南国リゾートホテル」であれば、沖縄で無くてもいい。ハワイでも変わらない。

○ 移転の影響で客層（生徒層）が変わった。東横線沿線の住人は「ちょっといい物に手を出す文化」。東雲は新しい町であり、住人は地方出身者が多い。「新しいものに食いつきのいい文化」を持っており、ここにある学校は新しいものを提供すると受け入れられると考えた。親御さんがその地に期待しているものは何か、マーケティングが大事。

○学校教育が進んでいくためには「べたもの（昔からあるもの）」と「きわもの（新しいもの）」の適正な比率・バランスが必要である。教員は白黒はっきり付けたいと考える人が多く、「箱形教室」が優れているのか「アクティブ教室」が優れているのか決めたがる。しかし大事なのは組み合わせと比率であり、どちらが優れているというものではない。

○新しいことを取り入れようとした時、日本の昔のメンタリティを持っている教員にはなかなか受け入れられなかった。日本の教育では「規則を守る」「あいさつをする」「時間を守る」というような要素が昔から最も重要とされている。しかしアメリカでは幼少のころから徹底的に自分で考えることが重要として求められている。日本の価値観も大切にし、その一方で子供たちが海外の人たちと互角に戦っていくための「考える力」を育てていく

ためにアクティブラーニングを受け入れるといった、この比率・バランスを保つのが重要である。

○今の日本の中学入試経験者は、試験で点数をとるためのトレーニングがされている。「答えを出しなさい」「パターンをつかみなさい」と言われて勉強しているので「なんでそうなるのか？」と聞くと思考が止まる。考えることに慣れておらず、クリティカルシンキング（※）が苦手な子供が多い。そこで、総合的な時間の中にクリティカルシンキングを鍛えようと考えた。

○以前は、子供たちが情報や知識を得るには百科事典、や先生、親の知識がほとんどで知識の量は限定的であったが、今は情報化社会となり、子供たちが多くの情報や知識を得られるようになった。そのため、子供たちに求められるのは、得た情報を本当か嘘かを見極め、組み立て、組み合わせる能力である。その能力を得るために総合学習でサイエンス科という授業を始めることとした。

○世の中は大きく変化している中、昔からの教員の考えや教え方を変えるのは大変難しく、サイエンス科という授業も受け入れられなかったが、クロスカリキュラムとして双方向型のアクティブラーニングを取り組むことで、子供たちが成長していく姿が顕著となり現在に至る。

（サイエンス科責任者山田先生より、当校の実際の取組について）

○当初ただ単にアクティブラーニングを授業に取り込んだがイベント型の授業となってしまう継続性がなかった。

○教員が変わるとやり方が変わり、その人の力量に頼ってしまうことになるため、公立学校のように2年周期に異動があると安定した継続的な学習ができなくなる。しかし「考える力」を育てるためには、「継続性」と「汎用性」が重要であり、その上で、中身を充実させていかなくてはならない。そのためにはフレームを作成することが有効と考えた。

○どんな教科においても「子供の生活力を育てる」というスタディスキルは重要であるため、3年間の「体系的プログラム」を作り、サイエンス科のフレームを構築した。このフレームを作ることにより、人事異動による弊害は無くなり、サイエンス科を安定して行えるようになった。

○当初、教員から多くの不満と批判が出され、受け入れてもらえなかったが、サイエンス科を通して子供たちが成長していく姿を見て、教師の反応は変わってきた。子供たちは「考える力」が伸びたことで自発的な態度をとるようになり、その変化を見て教員に受け入れてもらえるようになった。

○サイエンス科で学ぶのは情報検索のスキルである。得た情報が「本当」か「うそ」か、「意見」か「事実」か、を判断する練習を徹底的に行う。先生方はファシリテーターであり、口を出してはいけない。一歩下がって見てもらう。

○サイエンス科は、中学生に浸透しているが、高校生では一部で行っているのみである。

最近になってサイエンス科のフレームは、記述型の試験、AO入試や推薦入試の論文などの大学受験においても役に立つことがわかり、受験の結果として効果が現れてくるようになった。

(※) クリティカルシンキングとは、「批判的思考」と訳されることが多いが、「なぜ、どのようにそうなるのか」といった考える力のこと。

(※) サイエンス科とは、かえつ有明中・高等学校で独自に行われている「考える力」を育てるための教科である。

